

「紅毛雑話」に載せる「獅子之図」（佐藤家文書 和漢 208-1～5）

文書館 もんじょかん 動物記



書庫に棲む動物たち

23

蘭

こうもうざつわ

蘭学の衝撃～「紅毛雑話」

「紅毛雑話」の著者である森島中良は、「解体新書」の訳出にも参加した幕府の奥医師桂川甫周の実弟で、自らも医師・蘭学者・戯作者などとして幅広く活動しました。

「紅毛雑話」は兄の甫周がオランダ人に面会して得た新知識などを中良が一般向けにわかりやすく紹介したもので、天明7年（1787）に刊行されました。ほとんどの日本人にとって未知であった世界を紹介する啓蒙的な書物です。

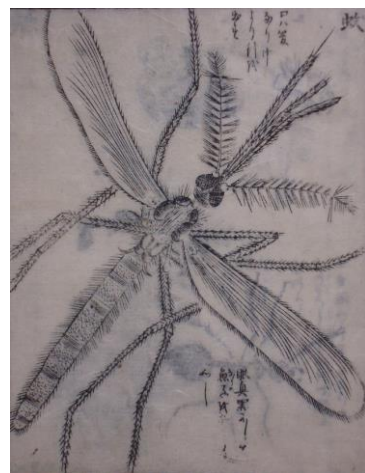
オランダの歴史・風俗、諸外国の地理的事情、西欧から日本への海路および通過する国々の事情や流行病やオランダの画法、エレキテルに関する図や記述などがあるほか、豊富な図版もあります。

挿絵には、オランダの博物学者コンストンの著した『禽獣魚介蟲図譜』（『動物図譜』）の中のライオン図（写真上）や、同じくオランダの博物学者スワンメルダム（顕微鏡による昆虫の精密・正確な解剖図を残し、昆虫分類の基礎を築いた）の『昆虫学総論』（「紅毛虫譜」）に描かれた蚊の図などを司馬江漢が模写したもの（写真右）等もあります。

ライオンは古来「獅子」として知られていましたが、この「獅子之図」は、「獅子舞」の獅子のような姿を想像していた人々にとって、どのように映ったのでしょうか。

ちなみに、生きたライオンが日本に来たのは、慶応元年（1865）、横浜に舶来したものが最初だそうです。

「紅毛雑話」の「蚊」

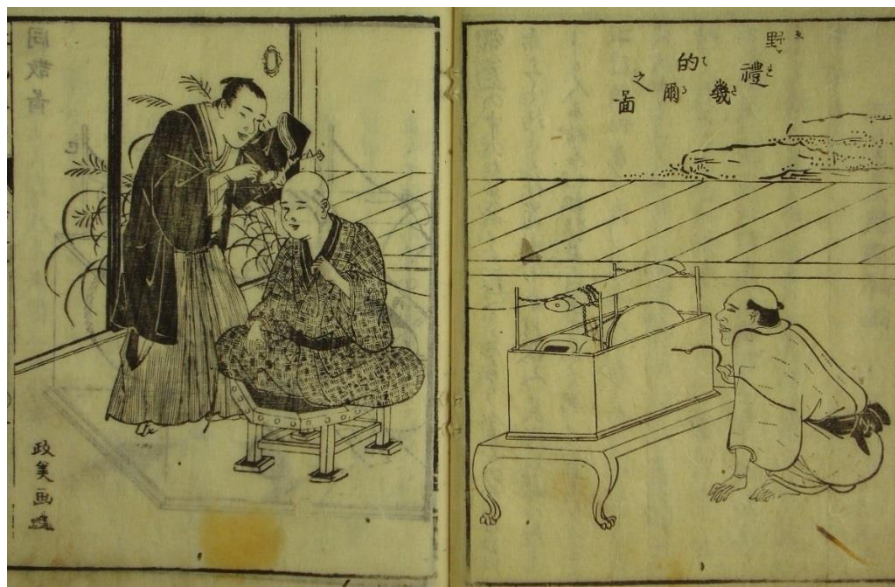


スワンメルダムの顕微鏡による昆虫の精密画を司馬江漢が模写したもので、「口は管なり、中より針を出す」と記されています。

「辰」のシートに載せた「ダラーカ」の図も「紅毛雑話」のものです。



「紅毛雑話」に描かれた「鱷之図」。ワニもまた神話の時代からある名称で、名称としては日本人におなじみですが、実際にワニの姿を見た日本人は、歴史上きわめて少数だったと思われます。



平賀源内と「動物図譜」とエレキテル

「源内はコンストンスと云ふ蘭書（「動物図譜」を指します）は、五六十金（両）の物にて、家財夜具までも売り払ひ、此書を得たり。此蘭書は、世界中の生類を集めたる本にて、獅子、龍、其外日本人見ざる所の物を生写にしたる事、かずかぎりなし」（司馬江漢の随筆「春波楼筆記」）

司馬江漢が平賀源内について書いた箇所的一部分です。ただし、この書は源内がタダでもらったという話もあります。源内は森島中良らとも交友があった（源内は森島中良の、戯作者としての師匠にもあたります）ので、「獅子之図」や「エレキテル」の図等も「紅毛雑話」にも転載されたのでしょう。